

Romantic Revival の先駆者 Charles Wesley

園 部 治 夫

I. C. Wesley における浪漫的要素

Charles Wesley が受けた最大の影響は恐らくメソジスト運動を二分したカルヴァン主義とアルミニアン—神の恩寵と自由意志の主張—の論争からであろう。C. Wesley はその兄 John Wesley に比較してかなりきざで、その上、辛らんな諷刺を好み、公然とそれを彼は自分の詩の到る処に曝け出している。その痛烈な諷刺を画いたものに、1741年の作詩 “The Horrible Decree” があり、カルヴァン主義者を露骨にこきおろしている⁽¹⁾。

The righteous God consign'd
Them over to their doom,
And sent the Saviour of mankind
To damn them from the womb:
To damn falling short
Of what they could not do,
For not believing the report
Of that which was not true.

The God of love passed by
The most of those that fell,
Ordain'd poor reprobates to die,
And forced them into hell.

He did not do the deed,
(Some have more mildly raved,)
He did not damn them—but decreed
They never should be saved.⁽²⁾

この種の痛烈な諷刺の筆法は彼の詩体の特徴でもあり、それはカルヴァン主義に対抗するもの以上のものであったかも知れない。

C. Wesley に見られる浪漫主義の要素はアルミニアン主義の見解が表明されている処に明瞭に見出される。彼の作詩が始まりその用語が粗野になった時こそ、彼はこの問題に深い関心をよせていたのである。

〈大きさ〉、〈大きな宇宙〉、〈広さ〉、〈多量〉という概念は彼の詩情をそそり、顕著な特異性を表わしている。卑近な語ではあるが、〈水〉、〈火〉は全人類の救済の恩寵を表明する比喩として極めて多く用いられている。即ち、〈川〉、〈河〉、〈海〉、〈洋〉、〈火〉、〈火の粉〉等の名詞を始め、〈無限の〉、〈絶間のない〉、〈制限のない〉、〈計りしれない〉、〈不屈の〉、〈豊富な〉、〈広大な〉、〈あふれるばかりの〉、〈おびただしい〉、〈尽きることのない〉等の形容詞より、〈この上もなく多く、豊かに広く〉、〈益々高く掲げられ〉、〈祝宴に云い尽せない喜びの灯をかかげて〉、〈喜びで有頂点になる程の勝利〉、〈目もくらむばかりの歓喜〉等の語句に至るもの、又数量を表わす語では〈千〉〈万〉等が極めて随所に見出され、そのほか〈全ての〉、〈どれでも〉、〈全然〉なども繰返して使用されている。

18世紀初期の厳格さと形式抱泥からの急変及び Joseph Addison (1672—1719)、Joh Dryden (1631—1700) や Alexander Pope (1688—1744) 等の書いた宗教詩との歴然たる相違は、C. Wesley が一度びアルミニアン主義を吐露している処に、容易に見出されるのである。しかもこれは次の George Eliot (1819—1880) の引用詩句に於ても容易に窺がわれる。

Thy goodness and Thy truth to me,
To every soul abound,
A vast unfathomable sea,
Where all our thoughts are drowned.

及び最後の一節,

Its streams the whole creation reach
So plenteous is the store,
Enough for all, enough for each,
Enough for ever more.⁽³⁾

この〈計り知られぬ富〉という叙情的必然性こそメソジスト運動の力となつて、現代生活に確保されてきたものである。

C. Wesley の詩を編集した多くの“さんびか集”の中で喜びの歌程よく歌われているものは外にないだろう。即ち他人の言を俟つまでもなくメソジスト派は歌から始まったと云っても過言ではあるまい。

1779年に“Large Hymn-Book”が出版されたが、これはその後、半世紀にわたってメソジスト標準版として残り、そしてその最初と最後の讚美歌は、典型的なアルミニアン主義を標榜するにふさわしい詩語で飾られている。即ち、

O for a thosand tongues to sing
My great Redeemer's praise. . . .

で始まり、最後は彼の信仰のクライマックスを表わした次のもので終わっている。

Live till the Lord in glory come,

And wait His heaven to share:
He now is fitting up your home:
Go on;—we'll meet you there.⁽⁴⁾

彼の作詩した讃美歌 539 編中で〈地獄〉という文字を用いたのは何と唯一の一回のみである。〈歓喜〉の語こそ C. Wesley を同時代の詩人より切り離し、又後に現われる浪漫派詩人の魁とさせたものである。1700年より1770年に至る詩人の中で、かの“On His Birthday”に見られる抒情的幸福感を画いた C. Wesley の右に出るものが果して幾人いるだろうか。

Away with my fears!
The glad morning appears,
When an heir of salvation was born!
From Jehovah I came,
For His glory I am,
And to Him I with singing return.⁽⁵⁾

C. Wesley の宗教詩のどの一つを取ってみても、当時の冷酷なまでのカルヴァン主義の陰影がキリスト教復興運動に導く光と激しさに如何に容易に替えられているかが窺えるのである。又この様な讃美歌を書きあげた詩人にこそ、才能と徳性のおどろくべき結合がはっきりと見出されている。彼こそは英宗教思想界に永遠に朽ちることのない大いなる遺産を残した詩人であり、又同時に誠実なキリスト教伝道者であるといえよう。

II. C. Wesley と浪漫主義前派の三詩人

1. Christopher Smart

Christopher Smart (1722—1770) は今日、その代表作の“A Song to David”

Romantic Revival の先駆者 Charles Wesley

で記憶されている詩人であるが、この宗教詩は彼がベツレヘム病院に入院中作りあげたものである⁽⁶⁾。彼が果して C. Wesley に会見しているかどうかは推測し難い問題であるが、その作品、特に宗教詩が C. Wesley の詩句に習い、新しい抒情的な歓喜を歌っていることは見逃せない。例えば1765年出版の詩集“A Translation of the Psalms of David”の中の数編に C. Wesley の型とおぼしきものが見出される。“The Epiphany”で幼児を歌い、

Breath so sweet, and cheeks so rosy,
Put your little hands to pray,
Take ye ev'ry one a posy,
And away to Christ, away.⁽⁷⁾

又、“The Presentation of Christ in the Temple”に於いても次のような Wesley の特徴が窺われる。

I speak for all—for them that fly,
And for the race that swim ;
For all that dwell in moist and dry,
Beasts reptiles, flowers and gems to vie
When gratitude begins the hymn.⁽⁸⁾

この詩は、Smart の幼児に対する愛情と、動物及び自然界に寄せる関心を表わしたものである。その点 Blake にも似ており、聖書から靈感を受けている。

Smart は C. Wesley を始め、他の多くの浪漫派初期の詩人の影響を受けており、ヘブライ文学、特に詩篇を重視していた。Wesley (John と Charles) 兄弟

も又詩篇をパラフレーズしており、Smart と Blake の両人が、同一出典に基いた心像で、その著作を充たしている点 Wesley 兄弟とは全く一致している。このような意図は1763年出版された“Song to David”に最も良く窺い知ることが出来る。然しこの詩は当時としては成功したものとはいえなかった。Mason は Thomas Gray 宛 1763年6月28日書簡を送りこの詩に関して次のように述べている。⁽⁹⁾ 私は“Song to David”を見たことがあるが、その時以来その作詩者は以前と変わらず狂人と断定している。⁽¹⁰⁾

1791年に“The Poems of the late Christopher Smart”上下2巻が上梓されたが、それには但し書きが付いており、“Song to David”は作者の抑鬱症の精神状態を示すものである故に、掲載しないとある。その後1819年同詩が再版の運びとなったとき、多くの批評家の目にとまり、称讃を受けるようになった。

その一例として Professor Courthope の言をあげてみよう。

「“Song to David”が見事な抒情的特性を有するのはメソジスト派の宗教的雰囲気によるものであることはいうまでもない……それは健全さの中にも崇高さを失わないように構成されており、その詩語法は、C. Wesleyの“Wrestling Jacob”にみられると同様な男性的素直さを表示している。」⁽¹¹⁾

2. William Cowper

文学上の意見では、多少異論があるかも知れないが、Cowper の宗教的背景は、Gilbert Thomas 著“William Cowper and Eighteenth Century” (1935) に正確に記述されている。Thomas の見解によれば Cowper は「福音主義のため命とりとなったような潜在的に創造力を有する詩人ではなかった。彼は福音主義に生きて歌を作り、又時には自分以上に高く自分を置くような批評家であった。」然し Cowper の経歴は、カルヴァン主義の影響ではなくてアルミニアンの影響を受けていたとしたら、変っていた筈だとも云っている。というの

Romantic Revival の先駆者 Charles Wesley

はカルヴァン主義は、その従弟で、当時ロック病院付きの牧師をしており、後にロンドンで最大の名声をはせた説教家 Martin Madan に始めて会った時、強烈に彼を捕え、遂に1764年彼はその信仰に改宗したからである。改宗してカルヴァン主義者になるということは、自分は神に選ばれた者であるということを実感として悟り、同時に心に聖霊の特別なあかしをたてることをいうのであって、これが極めて大切なことなのである。

たとえ自分が神から選ばれたものであるという信仰を失っても、依然としてカルヴァン主義者であるとするならば、それは既に滅びに至ったものである。

これに引きかえ、アルミニアン主義者なら、万民を救い給うのが神の御心であるということに信ずる故に、従前とは変った自分の生活のありのままの姿によってのみ体験される唐突の、或いは漸次の改宗に至るかも知れないのである。それ故、Cowper はメソジスト信者のアルミニアン派のものに最初会ってはいけなかったというふうに考えることは、不幸なことのように思われるかも知れない。というのは彼の威力と歓喜は、自分が選ばれた者であると信じていた時代に存したものであるが、その抑鬱症は、自分が果して選ばれたものであるかどうか信じられなくなった発狂時代につのっていたからである。1766年3月11日叔母の Mrs. Cowper に書簡を寄せて“私は恐らくメソジスト派に転向している”と云っている。その後 Olney に於いて John Newton (1725—1807) と親しく交際したが、その烈しいカルヴァン主義に禍されて Cowper の抑鬱症は再発したといわれているが、実際は彼の書簡や作品を綿密に調べてみると必ずしも Newton にのみその責を負わす筋合はなさそうである。その心機転換のために作った67篇の讚美歌は Newton の作をも加えて、Olney Hymns (1776) となった。

勿論ここで福音主義の Cowper に及ぼした影響を適切に取扱うことは不可能であるが、その宗教的見解から自分自身を敢て、‘傷ついた鹿’と書き表わしたことも時折あったとはいえ、彼自身福音主義のことを“心の泉を養う流れ”と書き表わすことが出来たことは注目に値することである。また Cowper は

次のような詩人になろうとあこがれていた。

Tell the world still kindling as he sung with
more than mortal music on his tongue,
that He who died below, and reigns above,
Inspires the song, and that His name is love.⁽¹²⁾

‘私は群を離れた傷ついた鹿であった’で始まる一節は Cowper が自分の信
ずる宗教のゆえに、悩み苦しんだことを説明するのによく引用されるものであ
るが、全詩を通じメソジスト主義が強調されているといえよう。

There was I found by one who has himself
Been hurt by the archers. In his side he bore,
And in his hands and feet, the cruel scars.
With gentle force soliciting the darts
He drew them forth, and healed, and bade me live.⁽¹³⁾

また読者を詩の領域にまで高めているのは、この詩の背後にある悲哀と疑惑
の色調でもある。

Where is the blessedness I knew
Where first I saw the Lord?
Where is that soul-refreshing view
Of Jesus and his word?⁽¹⁴⁾

Cowper が最高の宗教詩を作り、また最も記憶すべき詩句を生み出すことが
出来たのは、幾多の恐怖に打勝った信仰の勝利のゆえである。

例えば “Hark, my soul! it is the Lord” を見ても解る。

Can a woman's tender care.

Cease towards the child she bare ?

Yes, she may forgetful be ;

Yet will I remember thee.⁽¹⁵⁾

要するに Cowper はその精神が異常な状態にあった時、強烈なカルヴァン主義の信仰に禍され、そのため抑鬱症はその極に達したといわれているが、その反面、彼に関する正当な評価を以ってすれば、その生涯を通じ福音主義の信仰に徹したともいえよう。Professor Courthope の強調する処によれば、Cowper の詩と、C. Wesley の詩にかなりの共通点のあるのは Cowper がメソジスト主義の影響を受けたからだとなし、又次のようにも述べている。「詩的表現の古典的な純粋性は Cowper に於て極めて顕著な特性であると同時に、Wesley の宗教詩の特徴でもあった」。⁽¹⁶⁾

また「C. Wesley の詩に見られる顕著な特徴は、純粹詩を表わすあの確実なしるしであり、また強度な素朴さのある感情を表現する力である。」とも云っている。⁽¹⁷⁾

3. William Blake

Blake は福音主義復興運動の背後の精神に極めて強力な想像力に富んだ表現を与えた最大詩人の一人である。それ故 Blake とメソジスト主義との関係を摘要し、また Blake 及び C. Wesley の両者の詩に見られる類似点を指摘することは興味ある問題である。

Blake は Swedenborg 学説の信奉者達の間で教育を受けたので、彼のスウェーデン神秘説の象徴主義はその後期の作品中に明確に掲示されている。それに

しても、Blake はカルヴァン主義に共鳴を感じたため、それまでの信仰から離れ、またアルミニアンにも強く感化されてしまった。彼が C. Wesley と会見したという確証はないが、メソジスト運動に信服し、その教義の支持者であると自認していた。

C. Wesley の排撃した狂信も、また、彼自身忌み嫌った神祕主義も Blake には肝要なものであることに気がついた。Wesley にとっては、信仰復興運動の浪漫派的一面は脅威であるか、さもないければ、更によりものを得んために、耐えなければならなかった不快な面であったが、一方 Blake にとってそれは活力そのものであり、また宗教の根本要素であった。

Blake は福音主義者達の愛好した次のような語句や警句を絶えずその作品中に用いていた。〈選ばれたもの〉、〈救われたもの〉、〈神に見捨てられたもの〉、〈新生〉、〈犠牲〉、〈血潮〉、〈花嫁〉、〈小羊〉などである。勿論神祕主義に関する学識を有する作家なら、誰しもこのような語句を用いるのは当然であるが、Blake と福音主義者の両者が同時に絶えず、使用していた処に意義がある。Blake の作品が福音主義作家や、説教家に果して影響を及ぼしているかどうかは明白ではないが、C. Wesley あるが故に Blake はその人たちの作品を極めて真剣に考究したに違いないという証拠がある。彼の見地は Wesley のものとは、かなりのひらきがある場合も多いけれども、また同一点を強調する場合もよくあるので、彼のことを生粋の信仰復興運動詩人とは云えないまでも、共鳴者であることは疑う余地がない。

Blake の初期の作品は恐らく Spenser, Shakespeare, Milton 等の模倣であったかもしれないし、また、Isaac Watts (1674—1748) の “Divine and Moral Songs for Children”⁽¹⁸⁾ の影響も受けていると看倣される。C. Wesley の書いた子供のためのさんびかも大きな感化を及ぼしたもののようである。Blake の画いた最も有名な像は、〈神の子羊〉で、それはまた、C. Wesley の好んで用いた語でもある。“Songs of Innocence” の中でも Wesley の讚美歌と同一韻律で書かれたものが多く、次のものもその一例である。これは 1742 年 C.

Wesley の書いた “Hymns for the Youngest” の一節であるが、

Lamb of God, I look to thee,
Though shalt my exampl be :
Though are gentle, meek, and mild,
Though wast once a little child.

Hold me fast in Thine embrace,
Let me see Thy smiling face ;
Give me, Lord, Thy blessing give ;
Pray for me, and I shall live. . . .

Lamb of God, I fain would be
A meek follower of Thee. . . . (19)

1789年出版の “Songs of Innocence” に次の一節を見出すのである。

He is called by thy nature,
For He calls Himself a Lamb.
He is meek, and He is mild :
He became a little child,
I a child, and thou a lamb,
We are called by His name. . . . (20)

その他の例に於ても両者の類似点を見出すことは容易である。然しそれは必ずしも Blake が Wesley に負っているということの証明にはならないかもしれないが、少なくとも Blake が Wesley の子供のための讃美歌に精通していた

ということは想像しても差支えあるまい。

III. Romantic Revival の先駆をなす C. Wesley と メソジスト主義

1. 〈自由〉を愛すること

浪漫派復興運動の合言葉の一つは、自由、解放であり、同運動に関係を有していた、英国人作家の多くは始めは政治運動に於て自由解放、否むしろ革命的でさえあった。

一見したところでは Wesley をはじめとするメソジスト主義者はこれに反対しているかのようであるが、慎重に考慮を払ってみると、その見解も改めざるを得ないものがある。

Wesley 一家及びその一派は奴隷制度には真向うから反対し、到る処でそれと対戦している。⁽²¹⁾

浪漫主義前派と看做される Cowper 及び Blake は福音主義復興運動に強く感化され、またあらゆる形態の奴隷制度に反対した。

このように、メソジスト主義は当時英国に波及してきたフランス革命を阻止したかも知れないが、それは自由とは逆にある奴隷制度に反対したのである。メソジスト主義者達はあらゆる階級の人達に神の前では全てのものは平等であると説き、また最も富める貴婦人でさえ、いともいやしい街娼にも劣るかも知れないと教えた。C. Wesley はこのことを、誰もが喜んで歌う讚美歌の中に繰返してうたっている。

Outcasts of men to you I call,
Harlot, and publicans and thieves :
He spreads His arms to embrace you all ;

Sinners alone His grace receives :
No need of Him the righteous have
He came the lost to seek and save.

C. Wesley の宗教詩は、〈万民〉が救われるのが神のおぼしめしであるというアルミニアン主義を繰返し強調しているため、今日では読むのも退屈とされる場合が多い。貧しい下層階級の者達がメソジスト派に改宗することは、その心を革命思想に近よらせず、保守主義的感化を与えることなのである。しばらくの間、彼等は規則正しい生活を営み、金を貯蓄し、小冊子や、書物を読み、週間学級に出席し、革命思想に接すると恐怖感を広く表明したものである。このようにして、国中をあげて民衆は団結し、絶えず会合しては、生命に関する問題を論じ合ったり、神の前では万人は平等であるという信仰を持つに至った。その結果、19世紀の初期に於て、メソジスト派の指導者達は未だ見解は保守主義であったが、Chartists 運動の構成員及び労働組合の創設者達はメソジスト運動に密接な関係を有していた。また、メソジスト派の人々は動物に対する親切運動を強化した。

Blake と Cowper とは動物、鳥類、その他弱小生物に対する愛情を口を極めて強調した詩人である。この事に関しては John, Charles Wesley とともに浪漫主義の起因を堅固にした人たちである。

2. 感情の爆発

浪漫派復興運動のもう一つの特徴は実生活と文学に表われた鬱勃たる感情であった。即ち18世紀の紳士が抑制していた個人的感情と熱望が公然と表現されるようになった。

メソジスト派の多くの人々は、その悲しみと喜びの情を余りに明らさまに示し始めたので、そのような人々に対してむけられた攻撃は彼等が余りに感情的であるということ、言行、態度ともに、熱狂的であったことに対してであった。

Romantic Revival の先駆者 Charles Wesley

福音主義復興運動の推進力は人間の心から、自由と逃避を見出す喜びから、或いは、またその心を圧迫し、抑制していると信じていることから生じたのである。

C. Wesley は新生命をもたらすと思しき、この歓喜、感情の爆発を捕われの身から逃れ出す囚人として、或いは土牢にさし込む一すじの光として、常日頃例証していたのであった。人を改心させ、声をあげて泣かせたのは、このほとばしり出る感情のためであった。

O that the world might taste and see
The riches of His grace ;
The arms of love that compass me
Would all mankind embrace.⁽²²⁾

これは光なき熱を表わすものであるということになるかも知れないが、メソジスト教派が感情の表現を大いに促進させたことは確かである。これが浪漫主義に関係があるとするなら、メソジスト教派こそ浪漫主義に活を入れたものといえよう。

抒情詩は、感情がその根本となっているのであるから、浪漫復興にはこの型の韻文が数多く抬頭してきた。既に何回も記したように C. Wesley は浪漫復興期に於ける功績ある詩人であると共に、彼の詩の顕著な特徴は、第一に抒情的であったことである。讃美歌が抒情的で、歓喜の詩であることは、感情の表現に密接な関連がある。メソジスト派神学を理解するには、C. Wesley の讃美歌詩が最良の参考資料となる筈である。即ち1779年以降“メソジスト讃美歌”は常に前述の次の詩で始まっている。

O for a thousand tongues to sing
My great Redeemer's praise.

また同様な強調は次の詩にもうかがうことが出来る。

Meet and right it is to sing,
In every time and place,
Glory to the heavenly King,
The God of Truth and Grace.⁽²³⁾

C. Wesley は、その詩 “The True Use of Music” が余り楽しすぎ、殆ど、騒々しいまでの歌であるというので、多くの人々の非難の的になったことがある。

Listed into the cause of sin,
Why should a good be evil?
Music alas! too long has been
Press'd to obey the devil:

Who hath a right like us to sing,
Us whom His mercy raises?
Merry our hearts, for Christ is King;
Cheerful are all our faces.⁽²⁴⁾

メソジスト系の人々によって解放された感情の爆発は、音楽、歌唱熱を伴ってその後のメソジスト一派に大きな影響を与えたばかりでなく、Chatterton のように、彼等を非難した批評家や、Blake のようにそれらを模倣した詩人、及び恐らくその他の読者や韻文作家にも感化を及ぼしたといえよう。それがどの程度に評価されなければならないか、判然としないが、もし社会の状態と世人の趣向がその文学に影響を及ぼすものであるなら、メソジスト派のうたと教

えは、浪漫復興に関連をもつ抒情的歓喜の詩を啓蒙したに違いない。

浪漫主義が自由を求める愛、人間に対するより深い関心、より自由な感情の表現と、抒情詩の爆発とに切っても切れない密接な関係がある限り、メソジスト派はそれを助長し、或いはその精神の一部であったといっても差支えあるまい。そして C. Wesleyこそその中心人物だったと云えよう。

(註)

- (1) Louis F, Benson ; The English Hymn (1915), p. 232.
- (2) G. Osborn ; The Poetical Works of John and Charles Wesley (1868), Vol. III. p. 34.
- (3) John Telford ; The New Methodist Hymn-Book Illustrated (1935), No. 49 written in 1762.
- (4) The Methodist Hymn-Book, 1933, No. I. これは C. Wesley の作品中で最も有名な讚美歌の一つとして知られており、即ち、彼が1739年5月21日信仰上で一大転換をなした、一周年を記念して作詩したものである。それは彼のモラビア教派の師 Peter Böhler が Wesley の信仰告白を聞いて述べた次の言葉が動機となって作られたものである。“Had I a thousand tongues, I would praise Him with them all.”
- (5) Ibid., No. 874.
- (6) John Julian ; A Dictionary of Hymnology, revised edition (1907), p. 925.
- (7) Edmund Blunden ; A Song to David, with other Poems (1924), p. 72.
- (8) Ibid., p. 73.
- (9) William Mason (1724-1797) は詩人 Thomas Gray の親友で、その伝記を書き上げている詩人。
- (10) Blunden ; op. cit., p. 102.
- (11) W. J. Courthope ; A Dictionary of English Poetry (1905), Vol. V, p. 345.
- (12) W. Cowper ; Table Talk (1782), II, pp. 736-40.
- (13) W. Cowper ; The Task (1785), bk. iii, II, 112-17.
- (14) ‘O for a Closer Walk with God’ の見出しは Olney Hymns (1779) では ‘Walking with God’
- (15) Olney Hymns の見出しは ‘Lovest thou Me?’ とあり、これは次のイザヤ書49章15節を引用したものである。‘Can a woman forget her sucking child. . . . Yea,

Romantic Revival の先駆者 Charles Wesley

these may forget, yet will not I forget thee.’ これはまた C. Wesley の詩にも再三引用されている。

- (16) W. T. Courthope ; A History of English Poetry (1905), Vol. V. p. 358.
- (17) Ibid., p. 350.
- (18) Cambridge History of English Literature (1932), Vol. xi Chap. ix. J.P.R. Wallis. 及びフェリス論叢 IX (1964) 拙稿 ; Issac Watts の “Divice Songs” に表われた宗教性と道徳性 p. 37.
- (19) The Poetical Works of John and Charles Wesley, Vol. vi. pp. 442-3.
- (20) William Blake ; Poetical Works, Oxford Edition (1928), p. 67.
- (21) C. Wesley がどんなに <自由> の語が好きであったかを例示してみよう。
‘He sets the prison free. . ,’ (O for a Thousand Tongues, Methodist Hymn Book, No. 461.) ‘Born to set Thy people free’ (Come, Thou long-expected Jesus ; Ibid., No. 242).
- (22) The New Methodist Hymn-Book, No. 92.
- (23) Ibid., No. 17.
- (24) The Poetical Works of John and Charles Wesley, Vol. v. p. 397.